

アンケート調査による家庭科単元のイメージについて

郷家史芸¹，西川重和²，遠藤美聖³

宮城教育大学，¹大学院生活系教育専修，²教育学部家庭科教育講座，³家庭科コース

教員養成系大学の学生を対象に、家庭科単元のイメージを明らかにした。家庭科単元では「実習」の必要性が示唆された。実習を伴う単元が授業の楽しさ、興味、やりがい等に影響を及ぼしていることが分かった。また、家庭科単元には「身近な生活に役立つもの」が重要視されている。主成分分析からは、家庭科単元は『単元総合力』、『生活での実践性』で表すことができる。

キーワード: 家庭科単元、アンケート調査、家庭科教育、主成分分析

1 はじめに

「家庭科」という科目は、小学校・中学校・高等学校を通して、子どもたちが生涯にわたって、生活者として自立していくために必要な基礎的な知識や技術を習得させる重要な役割がある。ただ、単なる知識の詰め込みではなく実験・実習という実践的・体験的な授業を通して、社会の諸問題に対処できる「人間力」を身につけさせることが重要である。

生活者と言う視点から考えると、生活は人の暮らしに関わることですべてが対象となるため、広範囲の知識や技術を学ぶ必要がある。中学校の家庭分野を例に学習内容を記載すると、平成 20 年 3 月に改訂された学習指導要領での内容は、A 家族・家庭と子どもの成長、B 食生活と自立、C 衣生活・住生活と自立、D 身近な消費生活と環境が必修となっている。平成 29 年 3 月に告示された中学校の新学習指導要領[1]では、「家族・家庭生活」、「衣食住の生活」、「消費生活・環境」に関する三つの内容で構成され。グローバル化や少子高齢社会、持続可能な社会の構築等の学習内容が新しく加えられ、今後の社会の急激な変化に主体的に対応することが示されている。学習時間については、従来と同じで、技術・家庭として割り

当てられた単位時間（第 1 学年・第 2 学年 70 単位時間、第 3 学年 35 単位時間）を技術分野と折半して学習する形になる。

現在の総授業時間数を持って、新学習指導で示された全ての学習内容を授業で取り扱うことは非常に困難であり、新学習指導要領によって大きな課題を生じさせる結果となった。

新たな課題の対応として、学校現場で家庭科を教える教員にとっては、家庭科はどうあるべきか、授業展開をどう行うべきか等に関して、現場の教員の多くが頭を悩ませながら試行錯誤している段階である。授業内容についても厳選することは必須と考えられる。

本研究では、上記課題の対応以前に家庭科単元（学習内容）の在り方について、今一度、アンケート調査から実態を明らかにすることを目的とした。

2 アンケート調査

調査方法は、インターネットを用いて実施した。Google Forms を使用してアンケートの質問項目を作成し、Google Classroom において共有、回収を行った。調査時期は、平成 30 年 7 月に実施した。調査対象は宮城教育大学教育学部に在学する 2～3 年次学生 116 名（男子 39 名、女子 77 名）

であった。

アンケートは無記名、男女のどちらかを選択させ、8種の家庭科単元に対し、10対の形容詞対評価語（1:必要でないー必要である、2:嫌いー好き、3:楽しくないー楽しい、4:役に立たないー役に立つ、5:男女共通でないー男女共通である、6:内容が難しいー内容が簡単、7:興味関心がないー興味関心がある、8:生活で実践不可ー生活で実践可能、9:内容が身近でないー内容が身近である、10:やりがいが無いーやりがいがある）を5段階（非常にそう思わない（1点）、ややそう思わない（2点）、どちらでもない（3点）ややそう思う（4点）非常にそう思う（5点）で評価させた。単元名には小・中・高等学校の教科書[2-4]や先行研究[5-6]を参考に家庭科の単元を8種選定した。表1にアンケートの単元名及び内容を示す。(株)エスミのExcel多変量解析 ver.6.0によって主成分分析を行った。

3 結果と考察

3-1 家庭科単元に対する集計結果

図1～8は今回の調査結果をグラフ化したものである。「消費生活・環境」を除いた各単元の全てで3点以上という得点を示したことから、家庭科という科目に良いイメージを持ち肯定的に捉えていることが伺えた。この結果は三木氏らの研究[5]と同様な結果であった。

表1 家庭科単元名と内容

単元名(題材)	内容
①家族・家庭生活	人生設計とライフスタイル, 家族関係, 家庭生活と地域
②幼児の生活と家族	子どもの成長過程, 親の役割, 子育て
③消費生活・環境	消費行動と意思決定, 持続可能な社会環境, 消費社会と消費行動
④衣生活	被服の機能, 被服の役割, 衣服の手入れ
⑤食生活	人と食物の関わり, 私たちの食生活, 食事の計画と調理
⑥住生活	人と住まいの関わり, 住まいと住まいの文化, 安全な住まい
⑦調理実習	ハンバーグ, 味噌汁, 鮭のムニエル
⑧被服実習	手縫い, ミシン, 編み物, 洋裁

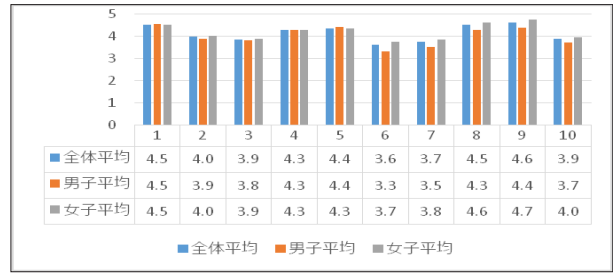


図1 家族・家庭生活の得点結果

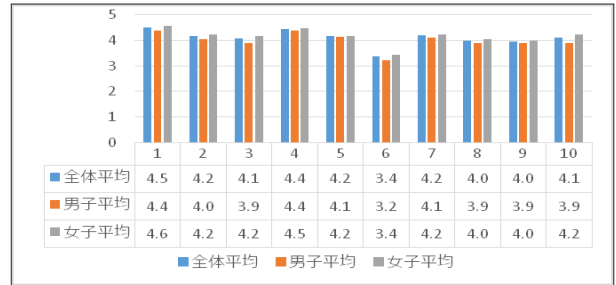


図2 幼児の生活と家族の得点結果

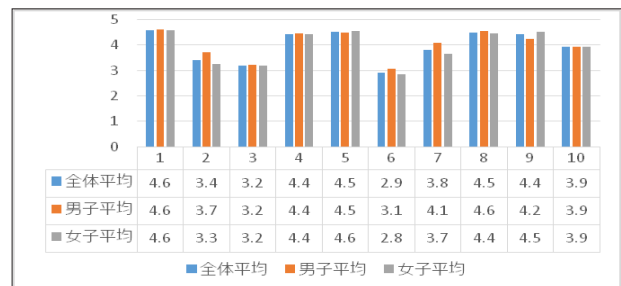


図3 消費生活の得点結果

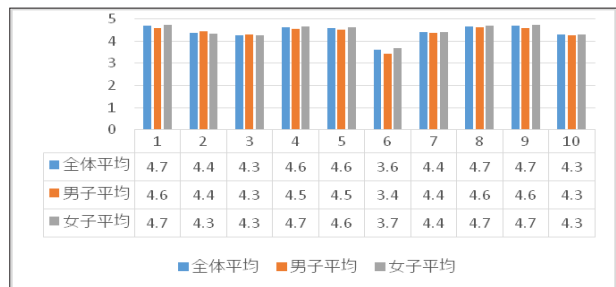


図4 衣生活の得点結果

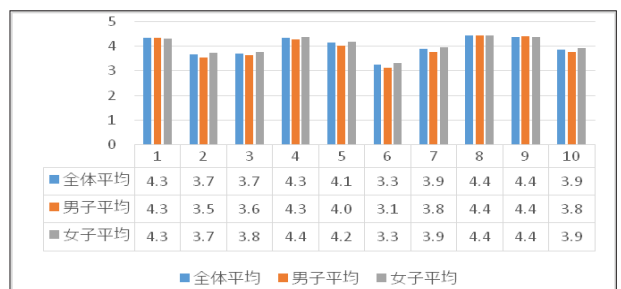


図5 食生活の得点結果

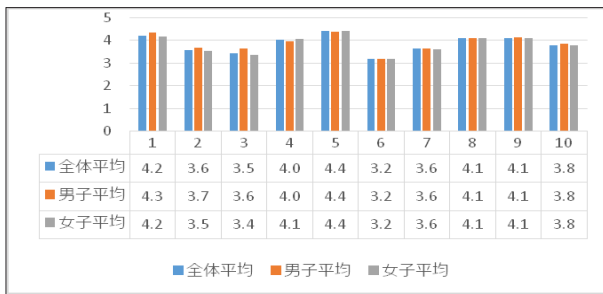


図6 住生活の得点結果

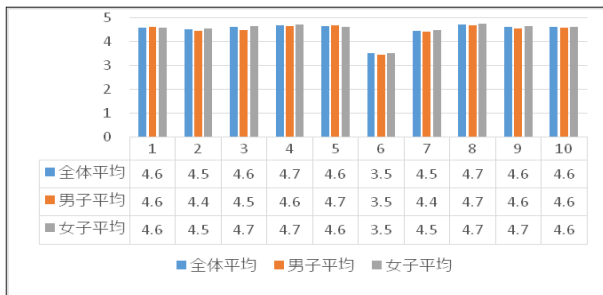


図7 調理実習の得点結果

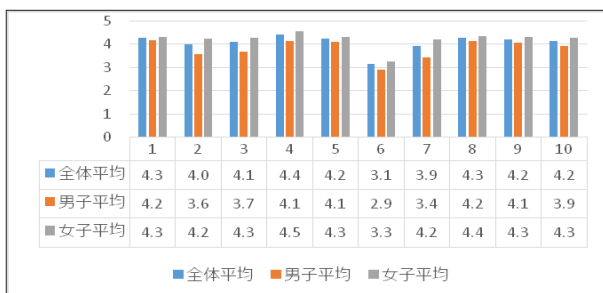


図8 被服実習の得点結果

3-1-1 家庭科単元の必要性

図1～8から、男女平均の点数は全て4点台の高得点で、今回の単元の全てを学習すべきと捉えている。現在は、技術の発展により物や情報が簡単に入手できることから、「家庭科」の必要性が薄まってきている中での高得点は、教員の力に負うところ大であると考えられる。単元では、「食生活」が4.68点という最大の評価であった。食は生命を維持するためには必須であることが高得点に繋がったのではないかと考えられる。

3-1-2 家庭科単元の好き嫌い

図1～8から、男女平均では「消費生活・環境」

(3.41点)と「住生活」(3.57点)の2単元のみが3点台の点数で、それ以外の全ては4点台の得点であった。この2つの単元は、中学校や高校においては、座学中心の授業になりがちであることが低評価に繋がったのではないかと考えられる。また、「住生活」は理科の科目、「消費生活・環境」は社会の科目との関連が強いために、理科や社会嫌いの学生の評価が点数に影響を及ぼしたのではないかと考えられる。教員を目指す学生にとっては、この2つの単元をどのように教えるか、前もって十分な検討を行う必要がある。

3-1-3 家庭科単元の楽しさ

学生が楽しいと感じる単元の全体平均での得点上位は、「調理実習」(4.60点)、「食生活」(4.27点)、「幼児の生活と家族」(4.08点)、「被服実習」(4.07点)の順番であった。これらの単元に共通するものとして、実習回数が多いことが挙げられる。学生は実習に関連した単元が楽しいと捉えている。「家庭科」の特徴は、実習を伴った授業が特徴であり、実習で製作物を作った時の達成感等が単元の楽しさに結びついたと推察される。

3-1-4 家庭科単元の有用性について

今回の単元については、男女平均で全て4点台の高得点であり、現在、学習している内容については役に立つものであると捉えている。

3-1-5 家庭科単元の男女共通性

現在、家庭科が1994年に男女共通の必修となってから20年以上が経過した。それまでの家庭科は女子教育、家事・裁縫教育が中心であり、女性向けの科目というイメージが強かったが、今回の調査結果では、「被服実習」にわずかながら開きが見られたが、それ以外の単元では、男女の平均による差は小さく、現在の学生には、男女共通の科目であると肯定的に捉えられていることが

確認できた。この結果は、藤田氏[7]の研究と同じ結果であった。

3-1-6 家庭科単元の内容の難しさ

図 1~8 から、「消費生活・環境」が 2.92 点で、それ以外の全ての単元においても 3 点台であり、優しい内容ではないことが確認できた。家庭科は生活に関連する広範囲の知識や技術が必要であり、また、「もの」の原理を理解するためには、分野によっては自然科学の力や深い専門性が必要となろう。現在の少ない授業時間数でいかに優しく教えることができるか、この点も「家庭科」の大きな課題の一つであると考え。筆者としては、子どもたちに優しく教えるためには、教員自らが絶えず学習することが大切であると考え。今回、学生が難しい内容と捉えているのは当然の結果であると考えている。特に「消費生活・環境」は、法律や社会情勢、経済などの幅広い知識や視野が必要となる。

3-1-7 家庭科単元の興味関心にについて

点数の高い単元の上位グループは、「調理実習」4.47 点、「食生活」4.39 点、「幼児の生活と家族」4.10 点、「被服実習」3.94 点の順番で、単元の楽しさで示した順番と同一であった。このことから、実習のある単元は興味関心が高いことが伺える。また、興味関心との相関係数が高いのが役に立つであり（相関係数：0.89）、学生にとって役に立つ単元には非常に強い興味関心を示していると推察される。

3-1-8 家庭科単元の生活での実践

図 1~8 から、男女平均では「幼児の生活と家族」が 3.98 点と 3 点台であり、それ以外の全ての単元は、4 点台と高い得点を示した。学生にとっては幼児と触れ合う機会や環境が少ないことが最も低い得点に繋がったと考えられる。単元全体では高い得点を示したことから、学校で学習し

たことを家庭等の身近な環境で実践することができており、家庭科の学習指導要領の目標を達成しようとする姿勢が伺える結果となった。

3-1-9 家庭科単元の身近さ

男女平均では「幼児の生活と家族」が 3.96 点と 3 点台であり、それ以外の全ての単元は、4 点台の高い得点を示した。この結果は、3-1-8 の「家庭科単元生活での実践」と同じ結果を示した。小学校家庭科の目標は、『日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にすることを旨とし、学習内容として非常に身近な環境である家庭生活に焦点を当てていることから、各単元を身近なものとして捉えていることが確認できた。「幼児の生活と家族」が低かった原因として、核家族の増加に伴い、子どもたちが幼児と触れあう家庭環境の減少等が挙げられる。

3-1-10 家庭科単元のやりがい

図 1~8 から、「調理実習」4.51 点、「食生活」4.29 点、「幼児の生活と家族」4.10 点、「被服実習」3.94 点の順番であった。これらの授業は実習の多い単元であり、実習の多い授業がやりがいのある単元に結びついていると言える。

以上の結果から、多くの実習を伴う単元が高評価であることが確認できた。

3-2 主成分分析[8]による家庭科単元のイメージ

「家庭科」の単元のイメージを明らかにするため、主成分分析を実施。表 2 に固有値、表 3 に固有ベクトル、図 9~10 に主成分負荷量、図 11 に因子得点を示す。主成分の数は固有値が 1 以上であることを基準にして求めた。表 2 から、固有値 1 以上は 2 個であった。表 3 から、2 つの主成分での累積寄与率は 81.5% と高い数値を示したことから、今回は 2 つの主成分を明らかにすることと

表2 固有値

主成分No	固有値	寄与率	累積寄与率
1	6.26	62.6%	62.6%
2	1.90	19.0%	81.5%
3	0.90	9.0%	90.5%
4	0.47	4.7%	95.2%
5	0.41	4.1%	99.4%
6	0.06	0.6%	99.9%
7	0.01	0.1%	100.0%
8	0.00	0.0%	100.0%
9	0.00	0.0%	100.0%
10	0.00	0.0%	100.0%

表3 固有ベクトル

	主成分1	主成分2
必要である・必要でない	0.303	0.263
好き・嫌い	0.349	-0.329
楽しい・楽しくない	0.332	-0.372
役に立つ・役に立たない	0.356	-0.014
男女共通である・男女共通でない	0.243	0.424
内容が簡単・内容が難しい	0.273	-0.147
興味関心がある・興味関心がない	0.357	-0.236
生活で実践可能・生活で実践不可	0.293	0.431
内容が身近・内容が身近でない	0.275	0.455
やりがいがある・やりがいがない	0.357	-0.185

した。家庭科単元の第1主成分名は、図9の主成分負荷量の全ての固有ベクトルが正の値を示したことから、この主成分は「総合力」を表すと考え、第1主成分名を『家庭科単元総合力』と名付けた。総合力の高い単元に結びつけるためには、学習内容が「役に立つ」「やりがいがある」「楽しい」をアップさせると良い。

第2主成分は、「内容が身近でないー内容が身

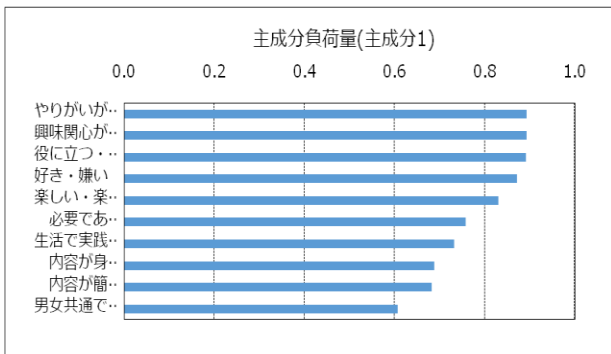


図9 主成分負荷量(主成分1)

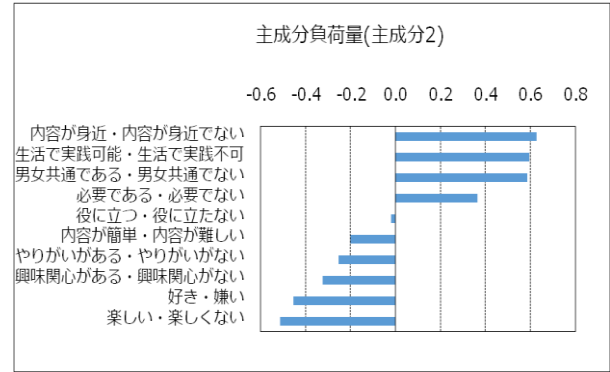


図10 主成分負荷量(主成分2)

近である」、「生活で実践不可ー生活で実践可能」が高い数値を表わした。身近なことを直ぐに実践しようとすることから、第2主成分名を『生活の場での実践性』と名付けた。

図11の主成分得点から、「家庭科」の『単元総合力』の高い単元は、「食生活」、「調理実習」の2つが上位であった。食は人間が生きていくためには必須である。「調理実習」は、男女関係なく近い将来、自分で生活を行っていくためにも間違いなく必要なものである。また、快適な食生活過ごすためには、調理技術等を磨く必要がある。逆に、総合力の低い単元は「住生活」であった。児童・生徒らの年代では、実生活への結びつきが想起しづらい内容[9]であることが考えられる。主成分2の『生活の場での実践性』は、「消費生活・環境」が高い数値を示し、続いて「家族・家庭生活」であった。学生は、これまでに毎日の生活を送るために様々な物を購入してきている。ただし、購入する物の多くは周りの生活用品がほとんどと考えられる。この経験の多さが高い数値に結びついたと推測できる。逆に、『生活の場での実践性』とかけ離れた単元は、「幼児の生活と家族」「被服実習」の結果となった。核家族の増加に伴って、学生が幼児と触れ合う機会や家庭環境の減少が低い得点に繋がったのではないかと推察される。

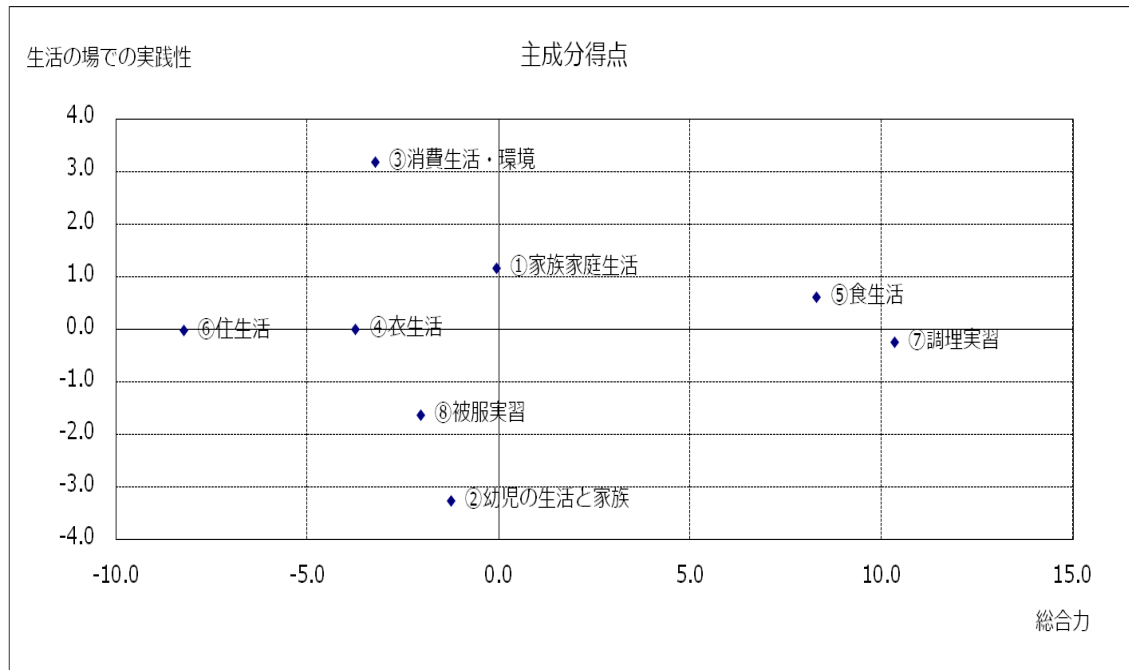


図 11 因子得点

4. むすび

本研究から、以下の知見が得られた。

- ①家庭科の単元は、肯定的に捉えられている。
- ②今回のアンケートから、実習授業の重要性を認識することができた。実習授業を行うことで、楽しい授業へと繋がり、やりがいのある科目へと繋がっている。
- ③学生には、家庭科は男女共通の科目であると肯定的に捉えられていることが確認できた。
- ④主成分分析の結果から、第 1 主成分名には『家庭科単元総合力』、第 2 主成分名には、『生活の場での実践性』と名付けた。『家庭科単元総合力』の高いのは「調理実習」「食生活」であった。
- ⑤『生活の場での実践性』は、「消費生活・環境」が高い数値を示した。

引用文献

- [1] 文部科学省: 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説, 家庭編, 平成 29 年 7 月.
- [2] 「新しい家庭 5・6」: 東京書籍, (H27~).

- [3] 「新しい技術・家庭 家庭分野」: 東京書籍, (H28 ~).
- [4] 家庭基礎 自立・共生・創造[家基 311]: 東京書籍(H30 年度)
- [5] 三木幹子, 高橋亜弓: 高校生の家庭科教育に対する意識調査(第 2 報), 広島女学院大学人間生活学部紀要, 第 5 号, pp1~9(2018).
- [6] 志村結美, 大橋寿美子: 大学生の家庭観, 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, No13, (2008).
- [7] 藤田智子: 大学生の「家庭科」に対するイメージにみる男女共修家庭科の意義と課題, 名古屋女子大学紀要, 59(家・自)pp1~12,(2013).
- [8] 多々納道子: 大学生の家庭科教育観家庭科の意義と課題, 島根大学教育学部紀要, 第 22 巻, 第 2 号, pp33~41, 昭和 63 年.
- [9] 小林文香: 大学生の高等学校における家庭科住居領域の学びの現状, 広島女学院大学人間生活学部紀要, 第 4 号, pp87~93 (2017).